日本科学者会議（JSA）滋賀支部

NEWS　LETTER

2019 年 1 月 25 日発行　第 42 号

事務局長　小島　彬
TEL/FAX　077-589-3724
akrkojima@ybb.ne.jp

ＪＳＡ第 22 回総合学術研究集会(22 総学) in 沖縄に参加して

2018 年 12 月 7～9 日に琉球大学で開催された 22 総学に参加した。エクスカーションの中部基地視察(7 日午前)と北部基地・辺野古視察(10 日)にも参加したので、6～10 日の 4 泊 5 日の長期旅行となったが、初めて訪れた沖縄の問題を深く理解できる機会となった。

１．　中部基地視察

7 日 9 時すぎに沖縄県庁前を小型バスで出発し、沖縄激戦地の嘉数台公園から普天間基地を眺望した。嘉数台公園には、日本軍のトーチカ跡や京都師団などの慰霊碑があった。普天間基地の 3000m級の滑走路付近には、オスプレイが駐機しており、住宅地に近接していた。その後、ヘリコプター落下事故があった沖縄国際大学前を通り、嘉手納基地に向かった。嘉手納道の駅屋上から嘉手納基地を眺望したが、3000m級の滑走路が 2 本あり、普天間基地よりも大規模であった。予定より 1 時間遅れて、14 時に琉球大学に着いた。

２．22 総学

7 日 14～18 時に全体会Ⅰ「基地のない沖縄、平和憲法と共に歩む日本を展望する」があり、琉球大学の科学者を中心に報告があり、滋賀支部会員の池内了氏の軍学共同の報告もあった。18：30～20：50 に特別講演会「沖縄に持続可能な社会を築くために」があり、沖縄の科学者や政治家の講演があった。ロビーのポスター・展示会場に原田幹事が作成した滋賀支部のポスターを展示した。

8 日 9～12 時の分科会Ⅰは、C3「福島原発事故の放射能は本当に安全か？」に参加した。京都支部の宗川氏や岐阜の松井氏の報告もあった。15：15～18：15 の分科会Ⅱは、私が主宰するＣ１「公害・環境問題の現在」に参加し、司会と発表を行なった。水俣病、イタイイタイ病、築地市場の豊洲移転、北九州市の環境、環境ホルモン、リニア新幹線、低周波音被害など 8 本が発表され、議論された。18：30～20：30 の懇親会では、琉球舞踊・エイサーなども披露された。

9 日 9～12 時の分科会Ⅲは、原田幹事が発表するＧ6「改めて今、研究者の権利・地位・倫理の課題を問う」に参加し、井上東北大学元総長の研究不正疑惑が話題とされた。14～16 時の討論集会「市民・社会とともにある科学の発展に向けて」に参加した。

３．北部基地視察

10 日 8 時すぎに沖縄県庁前を小型バスで出発し、キャンプハンセン第１ゲート前から基地内を見学し、第２ゲート前を経由して、辺野古浜に到着し、キャンプシュワブ第１ゲート前の座り込みテントと辺野古弾薬庫入口から見学した。大浦わんさかパークで昼食後、大浦湾のマングローブ林を見学し、午後は嘉手納道の駅屋上から嘉手納基地を再眺望後、那覇空港に向かい、夕方の航空便で伊丹空港に帰着した。

４．全体の感想

初めて訪れた沖縄だったが、下記の感想を抱いた。

① 米軍基地が多数存在し、沖縄住民は常時被害を受けており、普天間基地の辺野古移転のように、基地返還は微々たるものである。

② 沖縄県民所得と持ち家比率は全国最下位であり、経済的に貧困な県のままである。

③ 一部返還された基地跡地の再開発により、経済活動が活発になるので、沖縄経済界も基地依存経済から基地返還経済を支持し、それが現在のオール沖縄政治を支えている。

④ 辺野古基地建設費用はもちろん、米軍住宅の水光熱費まで日本政府が負担しており、日米地位協定や思いやり予算による不平等さが露骨である。

⑤ 辺野古の大浦湾では、マングローブ林、きれいな貝殻やサンゴが見られ、辺野古の埋め立てが自然破

壊の極致であることも実感した。

⑥　辺野古埋め立て工事の警備には、民間警備会社ＡＬＳＯＫの数百人が当たっており、莫大な費用が税金から支払われていることにも驚いた。

⑦　12 月でも那覇の気温は 20 度前後であり、本土との気温差が大きいことを実感した。

５．参考資料

1）日本科学者会議『日本科学者会議第 22 回総合学術研究集会予稿集』2018 年 12 月。

2）沖縄県『沖縄から伝えたい。米軍基地の話。Ｑ＆Ａ Book』。

（畑　明郎）

支部講演学習会開催
地球温暖化と再生可能エネルギーについて学ぶ

2018 年 12 月 22 日（土）、明日都浜大津において午後 2 時 40 分から約 2 時間、支部講演学習会が開催された。演者は日本科学者会議全国幹事であり、長年気象学・大気環境学に取り組んでおられる河野 仁 兵庫県立大学名誉教授、演題は「日本は自然・再生可能エネルギーの宝庫！　先進諸外国の自然エネルギー利用の現状と、原発・火力に依存しない我が国のエネルギー利用の展望」であった。参加者は会員外も含めて 13 名であった。

講演では（１）最近多発している集中豪雨などの異常現象が①地球の平均気温の上昇、②偏西風波動の変化、③海面水温の上昇に伴う大気中の水蒸気量増加に起因しており、特に日本近海の海面水温の上昇・水蒸気量の増加が世界平均に比して著しく大きい、（２）気温の上昇と CO_2 排出量の増加にはパラレルな関係があるので、世界各国は CO_2 排出量の削減を目指して、2020 年目標、2030 年目標、2050 年目標を掲げて努力しているが、日本はその努力を怠っている。また CO_2 排出量の大部分は火力発電由来であることから、各国ともに火力に代わって、水力、太陽光、風力、バイオマス、地熱などの自然エネルギー（再生可能エネルギー）による発電に移行する努力をしているが、日本はその努力を放棄し、未だに原子力をベースロード電源と位置付けている、（３）EU における自然エネルギー利用の具体例の紹介、（４）日本でも太陽光や風力による発電で現在の電力需要をほとんど賄えるだけのポテンシャルがあるにもかかわらず、10 電力会社のうち 7 社はこれらの電力の「接続可能量」を制限し、その拡充を抑圧している、などの説明があり、電源を火力や原子力から自然エネルギーへ転換しなければならない必然性と、そのためにはさらなる制度整備や技術開発が必要であることが強調された。あまり時間はなかったが、参加者との質疑応答も充実したものとなった。閉会後、演者と５名の支部会員が参加して、会場近くの居酒屋で懇親会が開催され、そこでも熱い議論が続いた。

時宜にかなった有意義な講演学習会となったが、会員・非会員を問わず参加者が少なかったのは残念であった。幾つかの商業紙が“催し欄”等に開催案内を掲載してくれたが、諸般の事情から開催日時が師走の第 3 土曜日・三連休の初日になったため、忘年会等の行事と重なった人も多かったと推察される。支部講演学習会は会員のみならず多くの人々に聴いてもらう、訴えることも目標にしているので、開催日時や宣伝方法についてはより一層の工夫が必要であろう。

（中村征夫）

原発のない社会へ 2019 びわこ集会のお知らせ

原発の海外輸出のもくろみが総崩れの状況ですが、国内でも市民の粘り強い反対で、原発推進勢力が追いこまれてきています。JSA 滋賀支部が毎年実行委員会に加わっている「びわこ集会」が、今年も下記の内容で行われ、会員の井戸弁護士も基調講演をされます。お知り合いを誘って多数ご参加ください。

****

日時：3 月 9 日（土）10 時開始、15 時デモ出発
場所：大津市膳所城跡、大津市生涯学習センター
10 時：催し物開始、10 時 30 分：講演「原発訴訟と裁判官の責任」樋口英明さん（元裁判官）、13 時：集会開始、13 時 30 分：基調報告　井戸謙一弁護士、 参加協力券：500 円、主催：原発のない社会へびわこ集会実行委員会、連絡先：090-9874－3266（野口）
http://biwakoshukai.shiga-saku.net/

JSA 滋賀支部のサイトをご覧ください→